

奇想天外の細川藩「帆柱」戦術：松井家文書・山口 県文書館ほかの「原城攻城図」

服部, 英雄
くまもと文学・歴史館：館長

<https://hdl.handle.net/2324/4149935>

出版情報：文化財情報. 275, pp.4-6, 2020-12. 熊本県文化財保護協会
バージョン：
権利関係：

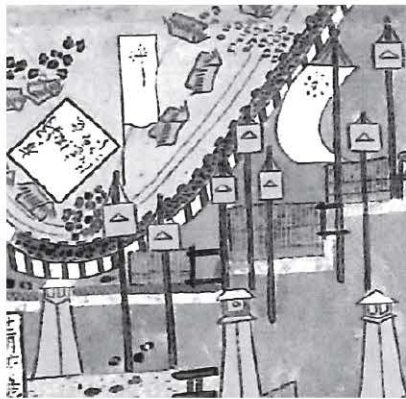
奇想天外の細川藩「帆柱」戦術

松井家文書・山口県文書館ほかの「原城攻城図」

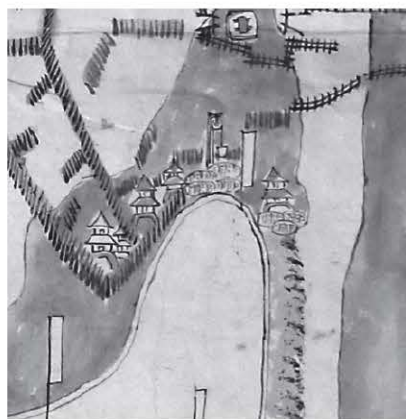
くまもと文学・歴史館館長 服部 英雄

城を研究する上で、実際の攻城戦、防衛戦でどのような戦術が採用されたのかを知ることは必要不可欠だが、具体的な資料は案外少ない。ここでは徳川時代最大の一揆、原城（はるのしろ・有馬城）での戦いで使用された攻撃用のエレベーター、帆柱＝釣井楼・吊井楼を紹介する。

今年2020年2月、永青文庫叢書『細川家文書』島原・天草一揆編が刊行されて、巻頭にA「肥前国有馬城之絵図」（松井家文書・熊本大学蔵）が掲載された。その直前に、新たな絵図発見として読売新聞が大きく取り上げていた。この絵図には帆柱が描かれている。『細川家文書』、『綿考輯録』をあわせ読むと、当時の細川藩の戦法、帆柱（釣井楼）による三次元戦法が手に取るようにわかって興味深い。土囊で防備しながら、最前線の仕寄（しより）の内側に、船の帆柱を、滑車も綱もそのままに、建てる。重い帆を上げるように、厚板で装甲され銃眼のみが切られた箱を、高く上げる。箱の中には侍が入っており、吊り上げられた箱から城内を偵察し、鉄砲や焙烙火矢で射撃した。帆柱の高さはどれほどか。復元の北前船弁財丸の場合、28メートルとのことである。ビルでいえば9階相当だから、この高さにまで達しうる寛永のエレベーターがあった。



帆柱・銃眼「鳴原御陣図」
（伝習館高校所蔵・柳川古文書館収蔵）



帆柱（釣井楼）に大きな滑車と箱
天草攻城之図／山口県文書館（1）

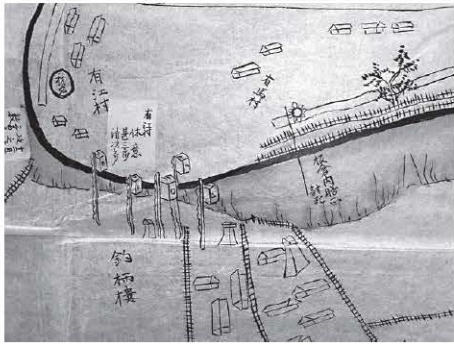
原城攻めでは攻撃基地としてまず山を築いた。築山（つきやま）といい、絵図でもそれぞれの持ち場の築山が描かれている。また今も築山という字が残り、位置がわかる。北東から順に細川築山、ついでその西に三人築山（松倉・有馬・立花共同の築山）があった。細川築山には大釣鐘が設置してあった。築山から城内に届くのは大筒で、築山が砲台場になった（後掲『綿考輯録』ほか）。高さが必要だった。築山からは仕寄場を前進させた（『日葡辞書』に Xiyori）。敵からの鉄砲は竹束で防ぎ、先端に井楼を設置する。井

この帆柱を描いた絵図は少なくとも八点ほどあって、それぞれ描写が違っている。

平成一四（2002）年、八代市立博物館未来の森ミュージアム「天草・島原の乱～徳川幕府を震撼させた120日～」の図録に、柳川立花藩作成のB柳川伝習館文庫・島原御陣図（カラー図版71-1立花資料館蔵・『柳川市史絵図地図編所収』）に描かれた帆柱が釣井楼として紹介されている。別に永青文庫の「島原木図幟馬印之図」単色図版29-1があって、その中に三本と書かれた「釣り井楼」の絵がある。これは立物を図化したもので、「城の扉際に配された釣り井楼は、人の入った箱を帆柱に吊るしたもので、上から鉄砲が撃てるようになっている。城乗りの時に援護射撃をさせるため、上使が実際に建設を命じたもので、細川家の仕寄場にも建てられた」と解説されている。御陣図では十一の帆柱が描かれている（帆柱は細川仕寄場以外には描かれていない）。

中村賢「島原の乱に関する一考察（二）」（九州産業大学教養部紀要）（6巻2号・1970）は半世紀も前に記述されたものだが、「勢楼（ゴンドラ*井楼・柄楼）を船の帆柱に吊り上げて城内を望見し、扉際の一揆軍を狙撃するものもあった」と紹介されている。

南島原市は全国の施設に保存されていた原城絵図を写真収集している。筆者はそれらを閲覧する機会を得た。松井家文書絵図こそはなかったけれど、柳川本以外にも、C臼杵市図書館所蔵図、D東北大学附属図書館本、E山口県文書館（1）、F山口県文書館（2）、G逢左文庫、H松浦資料館、I『綿考輯録』の諸本が帆柱を描写していることがわかった。それぞれ描写は異なっているが、滑車を描くもの、複数の銃眼を描くものがあった、具体的な様相がわかる。奇想天外の三次元戦法で一揆を決定的に追い詰め、細川藩仕寄場と対陣する位置にあった三之丸は二月二十三日、総攻撃の七日前の段階で、すでに防衛機能を失っていた。



釣柄楼 天草宗門一揆討伐図／山口県文書館 (2)

楼の高さは図によれば帆柱の半分強だから、15メートル前後と推定する。ふつうの火の見櫓よりも、はるかに高かった。築山の先が大名持ち場の仕寄場になる。一番海側（東）は細川陣で、東西に一陣と二陣があった。次が立花仕寄場で、以上が原城三之丸に対陣した。その西、松倉、有馬、鍋島陣が二之丸出丸に対陣する仕寄場だった。

原城は丘陵上の城だが、北端丘陵の一部が城内に含まれていたのか、不明である。細川藩仕寄場最先端の柵は東の海中に始まって、山の斜面（松井家文書絵図では「岸」）からその上に続いている。よって攻城側は現在浅間神社がある高台に仕寄場を設けることに成功していた。一揆側はこの間を空堀で切り割っているが、顕著な標高差はなくなった。これが命取りになる。細川勢は丘陵上に仕寄場を

前進、第一陣に大井楼1基・小井楼2基を建設し、建物で城内側よりも優位な高さを確保した。細川の第二陣は松井家文書絵図に雁木（階段）が描かれている。盛上・埋土もしたらしい。ここに小井楼2基を建設した。立花陣は深田（現在の水田面）から仕寄場を築いたので、高さの確保に苦労したけれど、小井楼2基を建設できた。とにかく高さを確保することが最優先だった。

絵図はいくつかの類型があって、A松井家文書、G綿考輯録、C白杵市図書館本の三者は印象が似るが、同じではなく差もある。

帆柱は松井家文書絵図によれば、第一陣に四本、『綿考輯録』では三本、第二陣には「綿考輯録」図によれば三本（松井家文書絵図は破損があって読めない）。これらの図では線が引かれているのみだから、帆柱と意識しなければ上昇装置とまで読みこむことはむずかしい。C白杵図書館本をみると、西側に三本、東側に三本、さらにその北西に二本の帆柱があって、北西の二本にのみ、箱がある。白杵図はこれらに「ツリセイロウ」と注記する。箱を上げた状態と、下ろした状態の双方を描いたようだ。帆柱を「釣り（吊り）井楼」（吊り上げる物見・攻撃装置）と表現した。

D東北大図は帆柱八本、うちいくつかに滑車のような丸い輪がある。箱は二面に三角の銃眼を持つもの、一面のもの、描かれていないものがある。上方（頭）は筋交がある。

B柳川伝習館本とG蓬左文庫本、H松浦資料館本も似る。Bでは細川家の九曜紋の幟が二本あって、横に三角の銃眼を切り込んだ四角の箱が合計十一、帆柱で釣り上げられている（図参照）。

E山口県文書館(1)、F山口県文書館(2)は他の図にはない描写がある。(1)「天草攻城之図」での釣井楼は一本で滑車に吊り下げられた様子が分かる。その前面には土囊がある。もう一点、(2)「天草宗門一揆討伐図」には五本の釣井楼（図では「釣柄楼」）があって、いずれも上まで引き上げられて、下にある井楼よりもはるかに高い。四角ないし三角に銃眼が箱に一つずつ描かれている。永青文庫「島原本図幟馬印之図」でも、同様に見える側の二面に三角の銃眼（狭間）がある。後掲史料（『綿考輯録』）では「猪ノ目」と明記されるから、ならば一面に二つあって、丸に近い形だったのだろうか（あるいは直角の二面をそう表現したのか）。

船の帆柱は倒して格納するから、帆柱装置を滑車ごと外したようだ。藩内の老朽船の既設を転用か。帆柱を設置する作業では、同時に築山から大筒を撃って援護し、一揆側の動きを封じた（下記二十日の史料）。

帆柱は『綿考輯録』（五巻・六巻）に類出する。寛永十五年二月六日条（五巻四四七頁）

堀裏を見申度候へ共、栖楼よりも見へ不申候間、先々竹たは裏に大船之帆柱をたて、箱をあつくさし、人を入れ、帆を引候様二仕、見せ申候へハ、悉堀裏見へ申候

とあって、さらにつづいて、堀際から二間ほど、細かな折のある堀が一重にあって、二間四方深さ一間の穴が数々あって、家の跡だった。石火矢に怖じて、堀底のなかに家を建てた跡があると報告している（「折」とは、後述する絵のジグザグに対応する）。

寛永十五年二月十五日条（四七一頁）にも帆柱でツルベのように人を引き上げたこと、堀の底を打たせ、焙烙火矢でこなしたこと、「つり勢楼」が二、三十も用意できれば安心だ、と、記されている。

寛永十五年二月十八日から二十日にかけての項（四八一～四八三頁）

石を打申二付、帆をはられ候由、なけたい松（投げ松明）・火矢あふな（危）き儀と存候

という注記もあるので、同時に帆も利用して投石防止に転用しようとしたが、あまりに危険だった。

二十日条（『編考輯録』四八三頁）にも

一 大船の帆柱を立、帆を張り、其影ニ而普請等被仰付、右築山より大筒御うたせ被成候、又厚板ニ而箱を作、猪の目に狭間を切、大綱を付、内に人を入れて曳上る様にこしらへ、則佐渡守か家来高野平右衛門と云ものを入れて高く引上る時、物に遮られ候哉、平右衛門、箱のうちより立出、釣たる大綱に取付、城中をのそむところに、徒党共か打鉄砲、箱に中り、三筋付たる繩一筋打切り、平右衛門か頭よりわつか二三寸上なりしかとも、平右衛門少も驚かずー

とある。上に登ったが、滑車が順調に動かなかったか、あるいは視野が遮られたかし、上に出ようとして、至近弾に狙撃されて壁から跳ねた弾で、綱を一本切られた。しかし偵察は可能だったとある。綱一筋が切れたとある。帆柱上部のような高いところに撃つことができたのか、それとも下の牽引する綱を撃ったのか。鉄砲射撃で綱を切ることはとてもむずかしいとされている。一揆の狙撃が正確だったことを示す。

次に『大日本近世史料』十 細川家文書二十二、寛永十五年二月十六日田中吉官并松平直政銘々宛書状（三九九六）を見る。

一 爰元の様子度々上使衆（松平信綱・戸田氏鉄）より御注進候間、可被聞召候、仕寄も堀きわへ五六間ほど二仕寄仕詰申候、火矢様々の事城中より仕候間、張番昼夜無油断申付候、惣手末諸道具・勢樓揃不申候由にて候間、我等仕寄堀へつき申候儀は成不申候間、只今之分にて相待申候、あまりちかすき候て、昼夜無油断候、勢樓ハ以上五ツあげ申候、せめ口せばく成迷惑仕候、堀きわへ付候ハ、帆柱にてつるべのことく仕、人を引あげ、ほりのそこへ鉄砲をうたせ、扱ほうろく火矢にてこなし可申と、右之道具誘（こしらえ）相待申候、つる勢ろうも数多用意仕候、可御心易候、城攻にては無御座候、仕寄にて仕こみ申筈にて候、堀裏を見申候へハ、はや堀を三重ほり申候、其外爰かしこをほり、土をあげ置申候、定ておとしあなも可有御座哉と存事候

こうした帆柱攻撃に対し、城内では堀を三重に掘った。これは帆柱から観察が可能だった。そして一揆は築山からの大砲による攻撃や、帆柱からの鉄砲・焙烙火矢を塹壕で避けた。松井家文書絵図にこの塹壕が、稲妻型・ジグザグ（先にあった「折れ」）で描かれている。方向を変えてどちらかで射撃を耐え凌いだ。

以上が二月十六日の様子で、最終段階の攻城措置が進められていた。その七日後になると

堀之分ハ不残打やぶり申候へ共、上使より御下知無之内はのり候事御無用（『編考輯録』二月二十三日条）

とあって帆柱の効果は抜群で、堀はみな破壊されていた。三の丸に関しては総攻撃の六日前には武装解除されていたが、総攻撃の指令が出ず、待機していた。

謝辞 本稿執筆にあたっては南島原市教育委員会世界遺産室長・松本慎二氏より多大な情報提供をいただき、また八代市立博物館・林千寿氏よりもご教示をいただいた。記して感謝したい。